

# 短歌

『玄関の覗き穴から差ししてくる光のように生まれたはずだ』

木下龍也／岡野大嗣(共著) 911.1

高校生男子二人の夏の七日間を切り取った、青くさい日常の光と影を217首の短歌で表現したミステリー仕立ての歌集です。三十八歳と三十歳の男性歌人二人の共著ですが、どちらの作とも明記されず、凝縮された物語を読んでいるようです。

ぼくはまたひかりのほうへ走りだすあのかみなりに当たりにたくって折り入って何か話があるような顔で夜ごとの母のおやすみ  
ピーサンで国道沿いをゆく僕におまわりさんが対話を望む

# 『猫とみれんと』

寒川猫持(著) 911.1

バツイチのわびしい男の一人暮らしを歌ったこの歌集、心とませるのは一匹の同居猫。どこか日常あるあるが満載で、ニマニマと頬がゆるんでしまいます。

# 『食をうたう』

原田信男(著) 911.1

秋は食欲の秋でもあります。猛暑を乗り越えて、ほっと一息。様々な作者が美味しいものを歌っています。心も満腹になりますように。

# 詩

## 『失くした季節』

金時鐘(著) 911.5

在日の詩人が到達した感慨、その溢れんばかりの想いの強さが凝縮されています。詩人本人は、四季を詩った抒情詩集と銘打ちたかったようです。

## 『主よ 一羽の鳩のために』

須賀敦子(著) 911.5

イタリア留学初期の頃、まだ若き著者が一年間に認めた詩を集めました。清廉と生きた彼女のやさしさが、巻頭に掲載された手書きの詩稿にもうかがわれます。

## 『詩ふたつ』

長田弘(著) 911.5

ページ毎のクリムトの美しい絵画、その溢れんばかりの表現に負けない心地よい言葉。まさに究極の芸術絵本、じっくりと堪能ください。

# 川柳

川柳はくすつと笑えるものあり、社会を風刺した奥深いものあり。二冊のなかから何句か紹介しましょう。

# 雑誌

『NHK 短歌』

『NHK 俳句』

『ユリイカ』

# 児童

『おーいぼんた』

茨木のり子ほか(編) 児童 911

『おーいぼんた 一俳句・短歌鑑賞』

大岡信(作) 児童 911

『うち知ってんねん』

島田陽子(作) 児童 911

『マンガで覚える図解 俳句短歌川柳の基本』

白石範孝(監修) 児童 911

# 俳句

## 『俳句で綴る 変哲半世紀』

小沢昭一(著) 911.3

洒脱で独特な味のある個性派俳優小沢昭一。本書は「変哲」という俳号で半世紀近く詠み綴った俳句日記です。俳句を始めたころの句で、陽だまりに何をあわてる毛虫かななどは思慕していた良寛さんを偲ばせる一句です。晩年の頃にはこんな句が、まだ生きている一服や春隣

## 『寝る前に読む一句、二句。』

夏井いつき／ローゼン千津(共著) 911.3

与謝蕪村から現代俳人まで、含蓄のある様々な十七句を一句一句、夏井先生とローゼン千津さんが対談形式で語ります。ローゼン千津って誰？なんと夏井先生の実妹。夫はアメリカ人のチェリスト。これがもう添削名人の夏井先生とコラボして、面白くて面白くて寝る前に読んだら眠れなくなりますよ。

# 詩歌はいかが？

詩歌は小説やエッセイと違い、よけいな言葉をそぎ落とし、磨き抜かれた言葉の結晶とも言えます。色づきつつある秋の景色のなか、万葉の時代の人々に思いを馳せてみたり、詩人を気取ってみたり、はたまた今人気の俳句をひねってみたりと、風流に身を任せてみてはいかがでしょう？